

インサイト

SRID キャリア開発事業：若者たちからのフィードバック

中沢賢治
キャリア開発事業担当幹事

SRID は国際開発協力分野の実務に携わり、あるいは研究に情熱を傾けている会員間の相互啓発と情報発信を目的とする団体である。様々な分野の経験者である会員が持つ知識・経験を若い世代に引き継ぎ、若者たちの問題意識とスキルを高め、将来に向けたキャリア開発に貢献することを目的として「SRID キャリア開発事業」が、本年度より本格的にスタートした。SRID 会員がこれまで個人講師として行ってきた出前講座やカウンセリングなどの活動を、学生グループとの連携を深め、より彼らのニーズに応じたものとするを旨とする活動である。本稿では、これまで関わってきた若者たちの声を紹介することで、本事業の現状と方向性をご紹介したい。

SRID キャリア開発事業の 3 つの柱

- 1) キャリア開発塾。
- 2) 国際機関、国際 NGO 等に勤務する若手邦人職員に対する支援。
- 3) 学生団体の国際協力活動に対する一部助成と連携強化。

活動の特色

- 学生・社会人の個人およびグループ・団体からの要請に対して、その具体的なニーズに合わせて援助機関等ですぐに役立つ実践的な研修を提供する。
- 学生・社会人のバックグラウンドと希望を基に、キャリア開発の方法・手段および努力目標について SRID 会員がアドバイスする。
- SRID は人材とノウハウを提供。研修・カウンセリング等の要請者が個人並びに学生グループの場合は無料。研修受講を希望するグループ・団体は実施会場と研修用器材を用意する。

1. 「キャリア開発塾」に寄せられた若者たちの声

学生団体の多国間学生交流（Multilateral Interaction with Students: MIS）からの要請を受けて、2016 年 6 月に「プロジェクト立案と運営管理の手法」研修（藤村講師、於青少年総合センター）が開催された。MIS が実施している国際交流活動を円滑に進めるために、実践的なプロジェクト立案と運営管理の手法を習得することがこの研修の目的だった。参加者から次のような声が寄せられた。



- 研修資料を予習した時にはわかったつもりだったが、ワークショップ形式で実際にやってみると簡単にまとまらないことを実感した。
- 現地コミュニティーの人達をプロジェクトにどう参加させるかが、プロジェクトを成功させる鍵であることを学んだ。
- 開発問題の理論と政策についての勉強はしてきたが、実際に小さな規模のプロジェクトにどう取り組むかというテーマが新鮮だった。MISの中でも下級生を指導する立場なのでこの研修はとても参考になった。今後の活動に生かしたい。
- 開発経済、金融、ビジネスの分野でも同じように実践的な話を聞いてみたい。国際機関などで仕事を経験した人たちの経験を聞いて参考にしたい。

学生団体の国際学生会議（International Students Conference; ISC）からの要請を受けて、2017年6月と7月に英語プレゼン研修（中沢講師、於青少年総合センター、東洋大朝霞キャンパス）が開催された。ISCが8月に計画している日本人学生と海外学生の討論会に向けて実践的なプレゼン能力を向上させることがこの研修の目的だった。参加者から次のような声が寄せられた。



- 英語の自己紹介で頭の中が真っ白になった。日本語と英語の自己紹介をあらかじめ用意して普段から練習することが大切だと思った。日本人によく見られる自己紹介例などが紹介され、どう改善すべきかという説明が参考になった。
- 人前で英語を使って話す機会がないので1分で自己紹介する経験が新鮮だった。本番までに話す力を伸ばさないといけないと思った。この練習をしたことで、時間の感覚が身についた。他の人のエッセイの講評を聞くことも参考になった。
- エッセイに1人1人コメントをもらう機会はこれまで無かったのでありがたい。細かい部分までエッセイの添削をしてもらい勉強になった。
- 自分と価値観の異なる人たちとどう接すればいいのかなどについてより聞きたいと感じた。

2. カウンセリングを受けた若者の声

Tさんのケース（海外大学院卒業、就活中、女性）

- 面接・履歴書対策について具体的な重点ポイントをテクニックと共に説明して頂いた。すぐに役に立つアドバイスで助かった。国際開発協力の仕事は他の業界とは異なる面が多い。実際の経験に基にしたアドバイスは参考になった。
- 私の葛藤や迷いについての質問に答えて頂いたことが、カウンセリングの中で一番貴重だった。（言語や、地域を絞るべきか、途上国と先進国どちらで勤務すべき

か、どの順番でキャリアを積むべきか、治安の悪い国を避けるべきか、etc.）私の経歴について、客観的なコメントを頂いたので参考になった。

- 就職活動は日々状況が変わることもある。連絡してからすぐに対応してもらい感謝する。私の専門（社会開発・ODA・教育）についてのキャリア構築のアドバイスも伺えるとありがたい。（注：このフィードバックに対応して関連した経歴を持つSRID 会員数人を紹介した）

3. 若手国際機関職員の声

国連機関での勤務を希望する人たちにとって、外務省が国連機関と連携して行っている JPO プログラムは重要な登竜門である。O さんは大手電機メーカーに勤務後、英国で都市開発経済学修士を学び、現在は国連開発計画（UNDP）本部で JPO として勤務している。2017 年 1 月の一時帰国の機会に「SRID サロン・エカポール」のゲストとして招き、懇談を行った。「パフォーマンスや予算の状況次第で契約が打ち切りになる例も多い。生き残りの為には日々結果を出すことが求められ、スキルを高める必要がある。転職を伴う仕事なので、家族の理解と協力が大切だ。」などの指摘があった。フォローアップとして懇談の詳細を SRID ニュースレターにまとめた。JPO の後の進路についても、カウンセリングを実施した。



4. 「何故国際機関を目指すのか？」若者たちの声

2016 年 10 月には国際機関银杏会（筆者が共同代表を務めている）が東大本郷キャンパスで開催した公開ワークショップに SRID から数人の講師陣が参加し、議論に加わった。その後も学生たちと SRID の交流は継続している。パネルメンバーとして登壇した学生たちはそれぞれの志望について発表を行った。



T さんのケース（法学部 2 年生、男性）

幼い頃に、ジュネーヴやニューヨークの国連機関を見学した。また、広島に住み、原爆の惨禍について考えて以来、世界の平和に貢献したいと考えてきた。学生サークルでの活動を通じて国連に勤務した経験のある人々から話を聞き、具体的な道筋が見えてきたと感じている。将来は弁護士資格を取得し実務経験を積みたい。その後に海外の大学院に進学することで語学力を向上させ、国連等国際機関を目指したい。チームを率いる力、問題発見能力、解決能力などを身につけるために学生サークルの運営において一層リーダーシップをとり、メンバー同士が切磋琢磨したいと考えている。

Nさんのケース（この春に社会人、女性）

高校の時に見たテレビ番組がきっかけで、緊急人道支援の現場で働くことを志した。国連を目指す理由は、各国の利害を超えて、「人間」として意思決定が出来る仕事に就きたいと考えているからだ。学部卒業後に民間企業を志望した理由は二つある。実務を通じて実践的なノウハウを身に着けたいこと、また、国際機関にとっても民間企業の行動原理や意思決定の方法を理解した人材が必要だと考えることだ。就活で学生時代の途上国での活動について説明した時に「なんでそこまでするの？」という冷めた感想をもらい、民間企業側の国際協力に対する無関心に気がついた。将来は国際機関と民間企業どちらの現場の経験を持つことで、双方をつなぐ架け橋になりたい。

Mさんのケース（この春に大学院進学、男性）

漠然と途上国で働きたいという思いが、大学でのサークル活動を通じて明確な使命感に変わった。貧困問題や、開発問題の多くは、市場経済を中心として成り立っている現在の世界が生み出したと感じている。自分一人の力だけでは何も問題を解決することはできない。関わった人に影響を与え、その人を変え、仲間を増やしていくことが大切だ。学生サークルの活動を通じて、自分の思いや考えを伝え、日々、関わった誰かに影響を与えることを心がけている。将来は弁護士として国際機関に関わることで人権を守りたい。様々な立場の人と関わり、より多くの情報にアクセスする中で、経験、知識、能力をつけたい。国際機関は何ができて、何ができないのか知りたい。

Iさんのケース（博士課程、女性）

私が貧困削減という問題の存在を初めて知ったのは、学部3年の夏休みに参加した「ベトナムのODA見学ツアー」がきっかけだった。日本と全く異なる生活環境が存在することに衝撃を受け、「何かしなければならぬ」という強烈な使命感を感じ、国際開発という分野の勉強を始めた。その流れとして、開発途上国という土地に住む人により近いところで仕事がしたかったので、開発コンサルタントという仕事を、最初の仕事として選んだ。現在は休職して、開発プロジェクトが貧困に対してどのようなインパクトをもたらしているのか、より効果的なインパクトをもたらすためにはどのような事業設計が必要なのか、というテーマで研究をしている。

5. 結び

SRID キャリア開発事業がスタートして以来、様々な学生、若い社会人の皆さんに出会った。将来の目標も、考え方も様々で一般化することは難しいが、いくつか共通していることがある。国際開発協力を目指す学生たちの多くは以前から漠然とした憧れを抱いてきている。大学の国際交流・開発協力を目指すサークルで仲間を作り、セミナーやワークショップに参加して先人たちの経験談を聞いたことがきっかけで、具体的な目標を抱くようになった人が多い。SRIDのキャリア開発事業を通じて、そういう若者たちを励ますことができれば幸いである。より多くの若者たちに国際開発協力の分野での仕事に就いてほしいと願っている。